



TITLE:

人文 第14号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第14号. 人文 1976, 14: 1-33

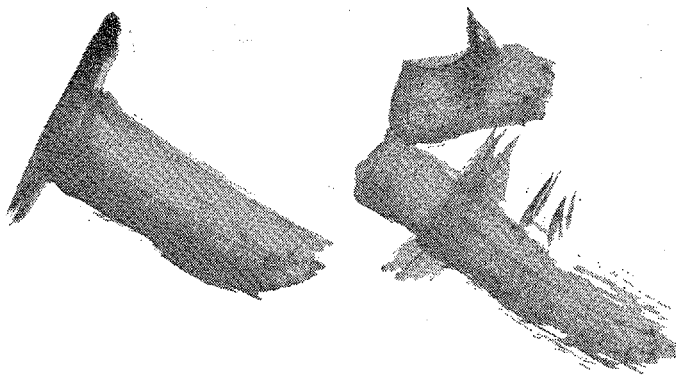
ISSUE DATE:

1976

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57140>

RIGHT:

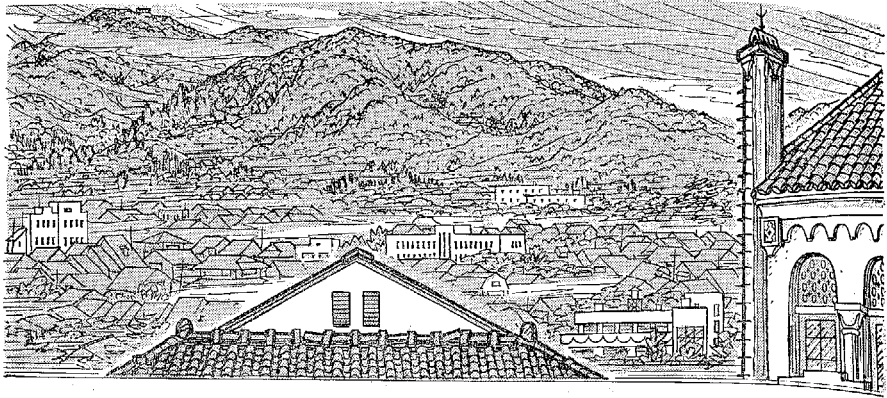


第一四号



1976

京都大学人文科学研究所



人 文 第一四号

1975年5月—1975年10月

も く じ

わたしの考え	2
SELBSTGERICHT	
講 演	樋口 謹一
開所記念講演	
『南方録』	能倉 功夫
坂本龍馬『新政府綱領』	飛鳥井雅道
『尚書』洛誥篇の注釈	小南 一郎
『大学』の解釈	島田 虔次
ボードレール「不遇」	松田 清
初期救貧法の原史料	中村賢二 郎
書 評	
井上清『宇垣一成』(中村)／日比野丈夫『目で見える中国の歴史』(大前)／渡部徹『解放運動の理論と歴史』(見市)／竹内実『中国への視角』(松田)／上山春平『続・神々の体系』(磯波)／林屋辰三郎『内乱のなかの貴族——南北朝期「園太暦」の世界』(川勝)／井上清『天皇の戦争責任』(河野)	12
共同研究のうごき	
輯本博物志(小南)／近世論理思想史(内井)／社会運動史研究の魅力(大前)	19
研究ノート	
技術・デザイン・社会	吉田 光邦
メンボタミアでのセトルメント・パターン研究	前川 和也
文学は復讐するか?	茂木 信之
旅	
旅行嫌いの旅行論(多田)／牡羊の鈴とふんどし(谷)／五台山仏光寺の二日間(田中)	25
書いたもの一覧(一九七五年五月〜十月)	
来信(11)・編集者から(18) 人のうごき(21) カット・田中重雄	29

SELBSTGERICHT

樋口 謹一

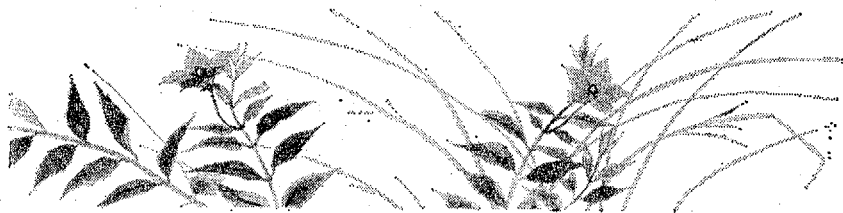
戦前の内田吐夢に『限りなき前進』という作品がある。わたしのばあい、名作『裸の町』よりつよい印象が焼きついている。

要するに、小杉勇フンするところの月給取が、誠実はこの世で必らず成功によって報いられるとの信条を裏切られて発狂する、という筋の悲劇である。封切は一九三七年のことだったが、わたしが初めてみたのはリヴァイバルでだった（ちなみに、戦前のリヴァイバルは現在とちがって、きわめて低料金の、名作専門の小劇場が京都にもいくつかあって、わたしたち学生・生徒にはじつにありがたい存在だった）。

一見たちまち好きな映画のひとつとなった。なにごともしずなりやすい、好きなのは何べんでも見たい、というわたしのこと、その後、大戦すでにたけなわのころ『限りなき前進』がまたかかったというので、なにをいってもと駈けつけたが、見終わってガックリ。

というのはこうである。主人公が狂気のうちにみずからの信条の実現を夢みる（社長になり、愛する娘が玉のこしに乗るなどなど）。戦時下の上映では、この夢の終わったところでぶったぎられていた。尻きれとんばもいところ、メダタシメデタシのハッピー・エンド、なんとも無慙で、憤懣やるかたなし。

わたしにとっての三〇年代と四〇年代との落差の、それは象徴的一事件である。



今春から、河野さんを班長に「一九三〇年代のヨーロッパ」の共同研究がはじまる。このわたしと同様、班員の多くにとって三〇年代はライフ・ヒストリーの一部である。その点がこれまでの研究テーマとはちがう。

じじつ、参加してくださる予定の某先生など、先日、相談のあと盃をくみかわしたとき、談フランス映画におよぶと、資本主義、帝国主義、社会主義を論じていたときはまたちがつた熱気をこめてしゃべりだした。

一九三〇年代はわたしにとってもまたそうした時代なのである。

そしてパール・ハーバーの直前、わたしが最後にみた洋画は、『スミス氏都へ行く』であった。結局ハッピー・エンドに終わって中途半端ではあるが、アメリカの政治の腐敗を諷刺したもので、戦争中のわたしのアメリカ観を微妙に色どってくれた。概してフランク・キャプラの監督作品はわたしのひいきで、主演女優のキャサリン・ヘプバーンやジーン・アーサーとともに今なお忘れがたい。

共同研究の範囲外の日本やアメリカの例だけあげ、フランス映画、イギリス映画の思い出し意識的にさせたが、書きだすときがないからでもある。

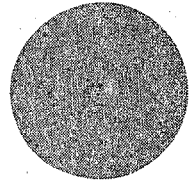
今度の共同研究ではやはり三〇年代ヨーロッパの政治経済が中心となるであろう。しかし、全身でもって生きた思想・芸術・文化その他をふりかえらないでいいはずはない。いやむしろ、ほったらかしにするのはマイナスであろう。

捨てがたい思い出（三〇年代末にはじまる戦争への参加も含めて）をどれだけ対象化しうるか。対象化の成果をどれほど研究に組みこみうるかはともかくとして、もうすぐそうした共同作業がはじまる。楽しくもまた辛ドイことである。



講演

夏期講座



八月一日—三日
於 分館講堂

『南方録』

熊倉 功 夫

『南方録』は謎の書である。

茶の湯を学ぶ人でもなければ、いや茶を学ぶ人でも『南方録』という書名を知る人は決して多くはない。それほどに、いわば特殊な書物ではあるが、しかし、わび茶の聖典といえは、まずこの書をあげぬわけにゆ

かぬ。聖典ともいふべき書物がなぜ謎の書なのか。まず最初に『南方録』とはどんな書物なのか、述べておこう。

わび茶の大成者は千利休である。しかし利休は、自らわび茶とは何か、を書き記すことはなかった。利休のわび茶とはその遺物と後の人の伝承のなかにあらわれるものでしかない。その利休のわび茶を、具体的に、しかもエピソードをまじえて伝えてくれるのが、『南方録』なのである。『南方録』が聖典視されるのは、利休のわび茶を伝えるほとんど唯一の伝書であるからだ。

利休の側近に南坊宗啓という禅僧がいた。堺の南宗寺の塔頭に住した僧である。南坊は利休に近侍しながら、そのわび茶の精粹をあまさず見聞し、見聞にしたがって留書きをつくった。留書はほぼ一巻をなすごとに利休に呈され、利休はこの留書の奥に、このような書がつくられたのは本意に違ふことだが、内容は自分の教えに相違ない、との証明を付したのである。このようにして五巻の秘伝書が南坊宗啓の手でつくられた。さらに、奥秘の一巻を書留めたが、利休はあまりに秘伝にわたるといって墨で消すように命じたという。これを墨引の巻という。最後に利休の滅後につくられた、最も大部の滅後の巻をあわせて全七巻が『南方録』の

全貌だ。

ところが謎はいろいろある。第一に筆録者である南坊宗啓という禅僧の事跡があきらかでないこと。ひょっとしたら架空の人物ではないかという疑問。第二に『南方録』の内容を吟味してみるといくつか時代的に矛盾する点がでてきて、他の茶書の剽窃くさい点があること。第三に南坊宗啓の自筆本が伝わらず、現在残っているおびただしい写本類は、すべて、黒田藩家老立花実山の書写本の転写にかかる点である。

第三の疑問に登場する立花実山という人は、のちに黒田家騒動のなかで非業の死をとげた人物であるが、江戸への参勤交代に伴う途次、京都からもたらされた秘書を発見、『南方録』と命名して世にだした、という事になってゐる。最後の二巻、墨引・滅後の二巻の実山による発見が元禄三年（一六九〇）であり、そのことが滅後の巻の一節に、利休が百年後にあらわれて茶の守神とならん、という語に符合しすぎるのが妙である。因みに利休の死は天正十九年（一五九一）であれば、実山は、利休の予言どおり、ちょうど利休百年忌に『南方録』を発見した、ということになる。このことから、『南方録』とは利休回帰の世の動向にあわせた、立花実山による偽書だ、という説が出てくる。

ほぼ偽書説におおわれた『南方録』をもう一度よみがえらせて、そのなかに真実があるとしたら、それは何か、を明らかにしたいのが、私の念願である。

坂本龍馬『新政府綱領』

飛鳥井 雅 道

大政奉還の演出者、それも陰に隠れた推進者として名高い坂本龍馬は、慶応三年（一八六七）六月から十一月に横死するわずか五ヶ月の間に、三つの政治綱領とでもいうべきものを残している。

一つは、六月十六日に成文化された、いわゆる「船中八策」と称される、もと無題の文書。これは、海援隊の書記官的役割をはたしていた長岡謙吉の筆になるものだが、もともと、龍馬が土佐の参政たる後藤象二郎と長崎から「船」にて上洛の途中、説得して後藤が同意した部分を文章化したものだから、まして、同志とはいえ別人の筆録ゆえ、龍馬の全体像をはかることができるか、疑問なしとしない。

二つ目は、大政奉還の翌日の十月十六日、三条家の家臣、戸田雅楽（のちの尾崎三良）と議論して作成した、これも無題の、いわゆる『新政府綱領』。これまた別人の手になる上に、現在まで五つのバリアントが伝えられており、これまた、かなりの吟味を要する。

このバリアントは、前將軍たる徳川慶喜をどう処遇するかといった、いわば新政府として決定的なところでの異本がある上に、用語その他は、いかにも公卿侍の発想に引きよせられているのが問題であらう。

そして、第三には、はじめて無題ながらも龍馬自筆の、いわゆる「新政府綱領八策」が暗殺直前の十一月（日付不明）に書かれている。だが、これも、当時の龍馬の立場として当然のことながら、土佐の家中、とくにその上層部に見せる配慮をもって書かれていると推定される部分を含み、これまた吟味の上でないとい、彼の真意とは断定しかねる。

講座当日は、この三つの文書を時間の許す限り検討したが、より詳しくは、その後出版された拙著『坂本龍馬』（平凡社）、および、この三つの文書を細く検討することを目的とする拙稿「奉還と討幕——坂本龍馬の三つの文書——」（『人文文学報』四十一号、一九七六年三月、以下二号に連載）を見ていただければ幸甚である。

『尚書』洛誥篇の注釈

小 南 一 郎

『尚書』（書經）は、儒家が經典とする以前から、中国古代人の共通の古典であった。段玉裁も言うように、五經のそれぞれを強いて比較するならば、『尚書』がその中でも最も重い經典と考えられたであらう。そこには、堯・舜・禹・文・武・周公などの「聖人」の発言が直接記載されているのである。

『尚書』は西周時代から漢初の頃まで長い時間をかけて形成された。更に魏晉時代に偽作の篇が附加されて、テキストの性格と伝承経路とはきわめて複雑である。そうした『尚書』の諸篇の中で最も早く成立したと考えられるのが五誥と呼ばれる五つ（六つ）の篇である。いずれも難解な文章であるが、中でも東都洛邑（洛陽）の建築に際しての周公と成王の発言を記したとされる洛誥篇については、特に議論が多い。

洛誥の文章には、中国の通常の文章に見られるよう

なりズムが発見しにくい。このことは逆にどのようなでも句読を入れることができ、様々な解釈を可能とする。魏晉時代の注釈「偽孔伝」は奇をてらわぬ平明な注であるが、一篇全体の論理的なつながりにはあまり意を用いていない。宋代の朱子学派の注釈「書集伝」は、経書を自からの哲学に引きつけることに急で、たとえば「偽孔伝」から句読を改めた所も、洛誥自体の意味に迫まるものであるよりも、道学の論理の要請による点が大きい。清朝の考証学の最良の仕事は、洛誥の経文を解釈することをあきらめて、古文家・今文家などの漢代の古注を復元することにとめていた。

それならば我々にできるのは、経文を自からの哲学のままに解釈するか、あるいは古い注釈を復元するだけ、いずれにしろ直接客観的に経文を考察の対象とすることはできないのであろうか。

経書そのものの意味はわからないのだとすることも一つの立場であろう。しかし経書の本文に迫る方法は、まだいくつかあると思われる。その一つは、西周時代の青銅器の銘文にいくつか「尚書」と類似の表現や文章構成があることを利用する方法である。これまでもこの方法が用いられなかった訳ではない。しかし金文にこうあるから『尚書』の文も同じ意味だという風に、両者の結びつけ方が直接的すぎるくらいがあ

るように見える。

金文（特に冊命金文）の背後にある儀礼の「場」の中で、文章の意味をおさえ、同時に『尚書』形成の「場」を見定めて、二つの「場」の偏差を正しく測定した上で、両者に共通する表現の意味するものを考えなければならぬ。言うは易く行なうは難い、しんどい仕事である。

『大学』の解釈

島田虔次

今年の夏期講座は、テキストをもちい、テキストに即して、という注文であった。わたしが選んだのは『大学』で、その冒頭の「大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善」の十六字と、それについて朱子の注釈、である。

最初に、順序として、『大学』という書物や朱子の注釈にたいするごく一般的な解説を述べた。しかし、それは内容的には、朝日古典選の拙著『大学・中庸』

の解説の部分と同じことであって、とくにいうほどのことは無い。最近、十年の間に、赤塚忠『大学・中庸』（新釈漢文大系）、山下竜二『大学・中庸』（全釈漢文大系）の二部の名著がでて、前者は、宋学以前の『大学』そのもののオリジナル・テキストとその思想の成立を詳細に論じ、後者は、宋、明時代における『大学』つまり四書のひとつとしての『大学』とその受容について綿密に論じている。しかし、わたくしは、それほど広範囲な言及はされた。ごくごく常識的に、知っておいてほしいとおもう最少限度のことだけを述べた。

朱子の注釈についても、問題をとりだせばきりが無いが、それらは、すべてさしおいてなるべく教室的な解釈に終始しようと心掛けた。したがって、この講演には、新味というものは全然ない。しいていえば、第二句にたいする解釈としては、公平にみて、王陽明の万物一体説にもとづく解釈のほうがまさっているであろうことを指摘した点が、それであるかもしれない。もちろん、この句は、朱子では「民を親にするに在り」と読み、王陽明は「民を親しむに在り」と読むのであるが、その点をも考慮にいれた上でのことはなしである。ことし教育学部の学生のために、朱子の『大学或問』を講読していて、この点をはっきり認識したので

ある。

研究所に在職中、開所記念日や夏期講座をいれて、五、六べんは講演したはずであるが、今回のがあと味がいちばんよかったようにおもう。それは、なるべく少数の、平凡な、基本的なことだけを伝えようとしたからであろう。別のことばでいえば、冒険的な所がなかった、というだけの話で、自慢にはならない。

ボードレール「不遇」

松田 清

このソネットは詩人の不遇をかこつと同時に不遇の中に埋没する心地よさ、あるいは不遇の中の心地よい香りを伝える詩として読むことができる。

第一連「①このずっしりとした重荷を持ち上げるには、②シーシュポスよ、お前ほどの気力がいるのに！③作品に心血を注いでも、④「芸術」は長く「時」は短かい。」「『悪の花』の中で「重い」という語は詩人の憂うつなイメージと結びついている。④から次の第二

連は典拠となったロングフェロー『人生讃歌』の刻苦勉勵を説くコンテキスト（『新体詩抄』の外山正一訳と井上哲次郎訳は明治ナショナリズムの進軍ラッパの響きがある）を離れて、無名詩人の孤独な死のイメージを詠んだものである。

第二連「⑤名だたる靈園から遠く離れて、⑥ぼつんとある墓地向って、⑦私の心臓は、とむらい太鼓のように、⑧葬送行進曲を打ち進む。」原詩③と⑧は323のリズム対応をなしており、一連二連にまとまりを与える。①の子音（PRSL）の左右対応、②と④の子音（TKR）の対応、⑤の母音（è è ü）の鏡像関係に注意しよう。

第三連「⑨——数多くの宝石は埋れて眠る⑩闇と忘却の中で⑪つるはしや測深機からはるかに遠く」第四連「⑫数多くの花は惜しげに放つ⑬秘密のように甘いその香りを⑭深い孤独の中で」原詩⑭は⑥のリズム53をとり、⑩と⑬は44のリズム対応をなす。また一連から二連、三連から四連への移行は④と⑤、⑪と⑫の句頭アクセントの対応によって強調されている。第三、四連は墓場詩人のトーマス・グレー『墓碑哀歌』を典拠とする。『新体詩抄』の矢田部良吉訳はこの部分を「深き水底求むれば 輝く珠も有るぞかし 高き峯をば尋ねれば かをる木草の多けれど 千代の八千

代の昔しより 人に知られて過ぎにけり」としている。ボードレールは手稿で「⑫数多くの花はひそかに放つ⑬哀惜のように甘い香りを」として、花（むくわれぬ詩人あるいはその詩篇）の香りに託して哀惜（regret）の気持を詠んだが、テキストでは逆に人に知られるのも惜しむ秘密（孤独の自己充足への転化）をうたっている。

ロングフェロー及びグレーの詩を書きつけたノートの余白にボードレールは幽閉者オーギュスト・ブランキの肖像デッサンを描いている。気の弱い叛逆者という点で両者はつながっているのかもしれない。

初期救貧法の原史料

中 村 賢二郎

救貧法の起源は宗教改革時代のドイツにあり、まず一五二〇—二一年頃『ヴィッテンベルク財庫規定』が出され、ついで一五二二年『ヴィッテンベルク教会規定』が公布されている。ここでは「他の都市もこれに

ならうように」という趣旨のルターの序文を付けて印刷され、最もよく知られている一五二三年のライプニヒの『共同金庫規定』の内容を史料に則して紹介するとともに、どのような事情でそのような改革が実施されることになったのか、を考えてみたい。

『共同金庫規定』では乞食、托鉢を禁止する一方で、働くことの不可能な貧民に対しては共同金庫から生活費を支給すること、のみならず、資金のない貧しい手工業者、農民にも資金を貸与し、返済不可能な場合には返済を免除することや、共同金庫の金で備蓄用の食糧を購入し、飢饉の年にそれを有償無償で配給すること等が定められている。共同金庫の財源は教区民による寄付のほか、教会財産、修道院財産を接収してそれに当てることになっている。もちろん教会財産が接収される以上、聖職者の給与も共同金庫から支出されることになっているが、中世においては宗教的目的のみで使用されていた宗教財産を、貧民援助、のみならず備蓄用の食糧の購入のような、教区民一般の利益のためにも使用することが、この規定の主要な眼目である。

『ヴィッテンベルク教会規定』中の救貧関係の条文では、教会財産のうち聖職者だけは、司祭の存命中は接収せず、その司祭の死亡後に共同金庫に移管するという過渡的措置が講じられているが、そのほかは『共

同金庫規定』とはほぼ同様の内容になっている。それに対してより早い時期に出された『ヴィッテンベルク財庫規定』では、財庫（共同金庫）の財源は寄付だけに求められ、宗教財産は手つかずのままである。要するに最初の救貧法である『財庫規定』では寄付だけを財源にして救貧を行おうとしていたのに対して、『教会規定』『共同金庫規定』では宗教財産を接収してそれを主たる財源とすることになっているのである。それはどのような事情によるのか。ほかの都市の事情も併せて考えてみた場合、それは市民運動、市民による宗教改革支持の運動の昂揚の結果と考えることができる。宗教改革の内容はこのあとまた後退することになるが、宗教改革の昂揚期には大幅な改革をふくんでいたのである。

来 信

北京大学より

林屋辰三郎所長は、昭和五十年十月二十
日、訪中の山田慶児助教授に、北京大学の麻
子英氏あての書簡を託した。ここに掲載する
のは、これにこたえて送られてきた麻子英氏
の書簡である。翻訳は小野和子講師の手をわ
ずらわせた。

林屋辰三郎先生

北京大学社会科学代表団の貴国訪問一周年に当りま
して、謹んで先生ならびに先生を通じて人文科学研究
所の諸先生に友好のおよろこびを申し上げます。

昨年の冬、私どもは、友人の皆さまの厚意あふれる
御招請をうけまして、美しいお国を訪問し、貴国の人
民、学术界、教育界および諸先生方のあたたかい歓迎
とおもてなしにあずかることができました。これを通
じて私どもは、日本の広汎な人民の新中国に対する友
好的な感情に親しくふれ、深い印象をうけました。あ
らためて林屋所長と友人の皆さまに心からの感謝を申

上げる次第であります。

私どもは、訪問の期間中、広く貴国の労働者、農民、
青年、婦人、学术界、教育界の友人の皆さまにお会
し、中日両国の子々孫々にわたる友好は、われわれ両
国人民の共通のねがいであり、大勢の趨く所、人心の
向う所であって、何人といえどもはばみ得ない歴史の
潮流であることをひしひしと感じました。

私どもの二十五日間の訪問は短かいものではありま
したが、両国人民の友誼を一だんと深く、両国の学術
界、教育界の相互理解を促進し、両国の文化交流を増
進する上で、非常に有益な役割を果たしました。

中日両国は一衣帯水の隣邦であり、われわれ両国人
民は、二千年の友好往來の歴史をもっております。中
日両国の子々孫々にわたる友好は、世界とアジア各国
の人民が超大国の覇権主義に反対し、自らの国家の独
立と主権を維持する上で、大きな意義を有するもので
あります。中日両国の偉大な人民は、必らずやさまざ
まの障害を排除し、中日両国政府の一九七二年九月の
共同声明の精神と原則にのっとり、われわれの友誼
を不斷に發展させ、両国間の文化交流を不斷に發展さ
せ、強化することができると信ずるものであります。

御健康を祈ります。

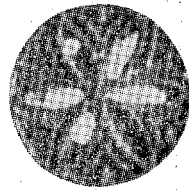
一九七五年十二月十九日

麻 子 英

書 評

井上 清『宇垣一成』

(B6判、二八一頁、朝日新聞社)



同時代史の人物としての宇垣一成は、ただ一点でしか私の記憶に残っていない。私の小学校六年生の頃、ある朝「宇垣一成氏に大命降下」という大きな見出しが新聞にのり、ついで何日かあと結局大命を辞退した、という旨のことが報じられていた。小

学生の私にそんな記憶が残ったのは、それがよほど大きな見出し活字であったためかも知れない。宇垣が皇道派と対立していたなどということも知るようになったのは、おそらく戦後のことだろう。

そんな宇垣一成の伝記を井上さんが書かれ、書評させられるハメになった時、二人の組合せに首をかしげたものだった。しか

し少し読みはじめると、なるほどと合点がゆくと同時に、また別の意味で首をかしげたくなった。

井上さんにとってシンパシーの懷けるはずもなく、そしてまた否定的な意味しかもたない宇垣の伝記の筆を取られたのは、要するに日本の軍国主義、ファシズムを批判し、断罪するためだったのである。宇垣はなる程皇道派と対立し、陸相現役武官制を盾にとった彼らの妨害にあつて、大命を辞退しなければならなかった。また彼は軍部の暴走を抑えようとする政界・財界人から信頼されていた。しかしかつて陸相現役武官制を守り通そうとしたのは彼であり、統

帥権を利用して軍部独裁、アジア侵略の基礎固めをしたのも彼であった。所詮彼は他の軍国主義者と同じ穴のムジナにすぎず、ただ物が少し大きかっただけのことだ、というわけである。そして物が少し大きいだけに、宇垣は軍国主義批判、断罪の格好の素材とされたのである。

しかし一つの別の目的のために、ある個人の伝記を書くというのは、伝記として邪道であり、伝記として成功しないのではないかな、というのが二度目に私が首をかしげた理由だった。読み進めてゆくうちに後半はさすがに伝記らしくなり、かしげていた私の首も上ってきたが、しかし正直のところ最後まで完全には上りきらなかったのである。その角度は伝記中の宇垣が軍国主義批判の道具から脱しきれなかったのに比例している、といつていいようだ。井上さんにしてなおかつそうであるとは、批判的伝記とは至難の業であるようだ。

(中村賢二郎)

日比野丈夫『目で見る中国の歴史』（中国の歴史）一〇巻

（B6判、三〇二ページ、講談社）

初めての書評としては、難しい材料にぶつかったものだと思う。専門分野がちがうということとはともかくも、写真集の書評など、素人にとって、いかにも扱いに困るところがある。美術写真とちがい、歴史資料としての写真は、それ自身、多くを語るものではない。歴史の文脈の中に置いて、はじめて写された「物」のなんたるかを知られるのにちがいない。

本書にも、写真の間に、著者による簡潔な歴史概説とキャプションが織りこまれてはいるが、それと写真に表された「物」との間の関係性を、親密なものとしてつかむには、評者の中国知識は、十二分に不足している。また、本書とて、これ一冊で足りりとするものではなく、全十巻から成る「中国の歴史」をしめくくり、残り九巻に視覚的なイメージを与えようと企画されたものだろうから、多分本書一冊を取り出し

て書評の対象にしても、著者の意図を汲むことにはなるまい。そういうわけで、評者は、ただ、本書を見て、考えるともなく想いついたことを記すのみである。

著者も言うように、最近、中国の考古学研究は、目ざましく進む建設の過程で発見されるおびただしい「物」によって、長足の進歩をとげているらしい。出土品その他の保存にも、充分気配りがされているとのことである。馬王堆漢墓の発掘調査は、その成果として発表され、全世界を驚かせた。

本書にも、例の女性のミイラを初め、多くの「物」が紹介されているし、著者も、本書全体をとおして、最近の学術調査がもたらした「物」を中心に構成したと言っている。この大量の「物」に接して、現代中国の人々は、どんな感慨をもつのだろうか。自国の科学のすばらしい進歩を喜ぶのであろうか、古くからの文化を誇らかに実感するのか、それとも、過去の階級支配の遺産を目のあたりにして、革命の偉大さを思いだすのであろうか。

いずれにせよ、現代中国の人々にとっては、われわれにとって以上に、興味を引く「物」であろう。

少年の頃、ツタンカーメンの棺を写真で見た時と同様の感激とともに、思いつきを書いてみた。

（大前 真）

渡部 徹著『解放運動の理論と歴史』

（B6版、叢書、部落解放3、二〇四頁、明治図書）

この本に次のようなことが書かれている。昭和26年、京都市は国際文化観光都市を宣

言した。その時、市がまずしようとしたのは、京都駅そばの線路沿いにある部落を掘

や木で隠蔽することであつた。このことは今日における部落問題の姿を非常によく象徴しているように思える。そして、こうした表面だけの取り繕いで済む問題でないことは誰の目にも明らかである。

ところで、私は東京で生れ育つたが、生の体験として部落問題に接したことは一度もなかった。日本人の増殖たる東京ではそれが仲々、表面化しにくいためであらう。

そうであれば、都市化の進行に伴つて部落問題も自然に解決されるといへなくもない。しかし関西で暮してみると、そう樂觀的ではいられなくなる。そして自分の生活空間とこの問題とがどこかで確かにつながっていると感じるようになった。その矢先にこの本の書評を命じられたのである。それ故、余人はいざ知らず私にとってこの本は興味深いというより、このような実感を一層、強くさせるものとしてあつた。その意味では大変しんどい本だった。

さて、内容は部落問題を主に解放運動の視点から扱つたものである。そこで展開される氏の論理は極めて明快である。氏は解放運動の基本を「民主主義運動」もしくは「大衆運動」としてとらえる。そして「短

絡」的にこの運動を「社会主義運動」に直結させようとする傾向を、水平社創立以降の運動史の研究、とくに日本共産党との関係にふれつつ批判される。無論、氏は部落解放運動が「単なる要求獲得運動」に還元しうるなどとはみていない。部落の人々自身を含めた全国的な「権利意識」の確立がない限り、問題の眞の解決はありえないからである。

日本人である以上は天皇制と表裏一体を

竹内 実『中国への視角』

(B6判、二〇七頁、中央公論社)

なすものとしてあるこの部落の問題を銘々が真剣に考える必要があるのではあるまいか。それが読後の偽らざる感想である。

最後に一言、批判めいたことを言わせてもらふなら、「差別と具体的に闘う」ことをしない者は「客観的」に「差別者」だという氏の主張は、それこそ「短絡」的ではあるまいか。そのように断定されてしまうと反論は出来ないが、後めたく沈黙せざるをえないからである。(見市雅俊)

「あとがき」に述べられた著者の三つの問題意識——日本と中国の接触、日本がとらえた中国、中国そのもの——を通じて「自己分裂」していない著者の内面をさぐつてみたい。(一)中国そのもの——著者は文革派と脱文革派との複雑な権力闘争として批林批孔をとらえ、わずかな事実をてがかりに、限られた新聞雑誌論文の寓意を解説しようとする。権力闘争に先だつ言論闘争

が歴史の寓話化によって遂行されるという中国の自給自足的文明史の特色を指摘する著者の語り口に中国ボケを感じないのでさわやかな気持だ。寓話の世界の裏側は血みどろだ。マルクス・レーニン主義の外皮の下に伝統的な徳治主義をもった脱文革派・周路線は、文革派の批孔から身を守るため、批孔を批林に限定し、文革派のスローガンを盗んでさらなる左傾を表う。著者のいう

文筆派の刑罰主義は階級和解を説く中国的ユマニズムに対する文闘ととらえることができる。周恩来が批孔の矢面に立たされずにすむたびに念はつとする著者にユマニスト的残滓を見出すむきもあると思うが、おそらく著者自身はユマニズムを乗り越えざるを得ない境地に迫込まれているのではないだろうか。すくなくとも政治的ユマニズムのぎまん性を。だからこそ周恩来を「おそらくは、中国における最後の『聖人』」と規定している。しかし権威、威信を実体とする毛沢東・皇帝権力との内的対峙については沈黙しつつ、ただ、「日本マルクス主義運動に天皇的な存在が再生産されるはずはないときめこむ」妄をいましめている。(二)日本と中国との接触——日本人あるいは一個人にとって中国と真理という二つのイメージが歴史的展開(武宗の廃仏、文革、批林批孔)によって一致から分裂へと移行するとき、真理イメージに固執するか、修正して中国を選ぶかが問題となる。著者はいずれもとらず、歴史展開を歴史事実として定着させようと努力する。それは恋愛関係、師弟関係で相手を知りつくそうとして失敗したとき、忘却ではなく自他の認識の

道を選ぶかつての恋人あるいは生徒の努力でもある。(三)日本がとらえた中国——女(『現代中国』)のへふつくらしたリアリティの魅力にひかれる日本人は権威への忠誠心や差別意識を内実とする戦後天皇制を

上山春平『続・神々の体系』

(新書版、中公新書、一八七頁、中央公論社)

本書は、人文第六号の本欄で島田虔次氏により論評された『神々の体系』の続篇であって、正篇と同じく五章からなり、いずれも雑誌『歴史と人物』に掲載されたものである。

京の三条の糸屋の娘(起)

姉は十六、妹は十四(承)

諸国大名は弓矢で殺す(転)

糸屋の娘は目で殺す(結)

で示される起承転結にあてはめてみれば、正篇は、「第一章 古事記の神統譜」が起、「第二章 記紀神統譜の東アジア的背景」が承、第三・四・五章が転ということになり、結のない姿のままに刊行されたわけ

担う者に他ならず、へざらざらしたリアリティ・Ⅱ権力闘争によってあざむかれる。「事実」は、ただ事実であるだけにすぎない。」著者は熱狂の腑分け師である。

(松田 清)

ある。したがって、正篇を読んだ者はその点に対する不満は払えなかったのであって、青木和夫氏が書評した際、「上山氏にもう一章書き加えていただきたかった。つまり、記紀神話が奈良朝の藤原氏の権力づけに、いかに適格的であったかを」と述べられたのも、無理からぬことだったのである。

結が欠落したまま刊行された正篇に対する井上光貞氏らの批評をも踏まえて書き継がれた本書、続篇所収の諸論文は、記紀神統譜の基本構造と藤原不比等の政治構想との照応関係を見事に「結」びつけた成果をここにもたらしした。はじめに神事は中臣

(意美麻呂)、政治は藤原(不比等)という二本立ての同族分業の構想があり、それの律令官制における投影が神祇官と太政官の二本立てであり、歴史づくりににおける投影が『古事記』と『日本書紀』の二本立てであり、神界における投影がアメノコヤネとタケミカヅチである、と上山氏は結論された。これら四組の二本立て構想を説き去り説ききたり、第四章まで読む者をして一氣にひきずっていく。正篇について島田虔次氏が「そこで展開せられるさまざまな推論、考証はきわめて多彩で興味津々たるものがある」と述べられた印象は、この続篇でも一向に衰えない。記紀神話の基本構想の成立時期を八世紀とみる著者の説への井上氏の批判に対する反批判(第二章)は、論争家の面目躍如たるボレミックな色彩を濃厚に帯び、私には説得的であった。ただ「第五章 伊勢神宮の神事と歴史」は、氏のいう「神祇革命」にふれた文章なのであるが、執筆時期が第二章と第三章を執筆された時期の間であったこともあり、何となく、落付きが悪い。第五章とせず、附章とでもしておかれた方が読者に親切だったのではなからうか。

本書の副題は、正篇では「深層文化の試掘」とあったのが、今回は「記紀神話の政治的背景」と改められているが、その変更には余り深い意味はないとみてよからう。要するに、記紀神話の政治的背景の考察を、著者年来の主張たる深層文化論の基礎作業というかたちでなされた成果なのである。周知のごとく、上山氏は日本文化の特質を、女性的な受容型文化の典型として、徹底したネガ(負)の役割に見いだされる。そして、老子に「谷神、死せず、これを玄牝という。」とある言葉に共感を示され、「歴史と人物」の古語拾遺欄にも、この語句を揮毫されている。ところで、現今の中国では孔子批判運動の一環として、魯迅が顕彰さ

れているが、魯迅の筆蹟の残された古語拾遺というべきものの中に、老子のこの章のあるのが、興味ぶかい。魯迅と上山春平、どこかに共通の地盤があるのであろうか。ついでに申せば、例の馬王堆三号墓から出土した老子帛書は、甲本乙本ともに、この部分は「浴神不死、是胃玄牝」となっている。従前のテキストでも、河上公本は、谷神を浴神と書き、浴は養の意だというが、さすれば、上山訳はいくばくかの修正を要することになるのであろうか。さるにても、近年の中国出土文物の諸報告は、われわれの通念につきつぎと修正を求めて、研究意欲を刺激してくれることではある。

(磯波 護)

林屋辰三郎『内乱のなかの貴族』

——南北朝「國太曆」の世界——

(A5判、季刊論叢「日本文化」I、一八〇頁、角川書店)

「國太曆」は洞院公賢(一二九一—一三六〇)の日記である。公賢は足利尊氏(一三五八卒)北畠親房(一三五五卒)とまさしく同世代。南北朝が対立し、武家が乱闘

して、上皇・天皇もしばしば京都から「没落」する時代に、北朝の左大臣一ノ上から太政大臣を歴任する一方、京都回復の挙に出る南朝からも太政大臣に除せられる。当

時の公家社会における第一の有識者として、続発する「以ての外」の事態を、かれ特有の「複眼」で見すえながら、しかも最後には栄養失調で死なねばならぬほどの困窮に追いこまれながら、常に京都において、公家文化の根拠としての有職輿礼を護持しつづけていた。その詳細な日記を追って、かれの目を通してながら、しかも他のさまざま史料を駆使した著者独自の新鮮な見方を織りまぜながら、この内乱時代を浮き彫りにされた著者の手腕は、さすがというほかない。

私はこれを読みながら、実に久しぶりに歴史そのものも面白さに引きこまれていった。読み終えた後にも、久しぶりに味わった歴史の面白さを反芻しつづけた。本当に久しぶりという実感は、私の読書量の貧しさにも起因するだろう。しかし、この種の面白さは戦後のいわゆる科学的歴史学が久しくどこかに置き忘れてきたものではないだろうか。そういえば、著者はすでに三十年前に本書を予定されていたらしい。

「古い史料カードを整理しながら、六十歳をこえた今、三十年若返った気持でこの論稿を書き上げた」と著者はいわれるが、三

十年若い世代は、この種の面白さを忘れていたのではないだろうか。面白さは読まなければわからないだろうが、今この時点で本書を書き上げられたことに、私は大へん意味があるように思う。

かつて私は中国の南北朝末期、六世紀中葉の侯景の乱と江南貴族の没落を論じたことがあり、それを一つの理由として編集委員は私にこの書評を割りあててきたのだが、まさに当時の中国でも悪党の活躍する下剋上のさなか、貴族は惨怛たる状況につきおとされていた。そこでもまた「故事旧章」

——日本という有職故実——に明るいことが、貴族の生き残りうる唯一の根拠であった。日本の南北朝そっくりの状況が中国では六世紀にすでにおこっていた。「國太曆」

のような日記が当時のものとして今に残っておれば、どんなに面白いのかとの嘆きと、日本史に対する羨望に似た気持を懐かざるをえなかった。

以前にも一度この欄で書いたことだが、「歴史は内乱によって形づくられる」という林屋史学のテーゼに私は賛成である。

ことに中国史はその見方でもう一度見なおす必要があると思っている。六朝末期がすでに日本の南北朝だとすれば、唐代はさしずめ室町時代に当るだろう。本書を読んで、古代専制帝国の完成態だといわれる唐帝国を、内乱中心にずたずたに寸断してみたいという白日夢をまたまた夢みたことであった。

(川勝義雄)

井上 清『天皇の戦争責任』

(B6判、二三〇頁、現代評論社)

私たちのように第二次世界大戦を経験した者にとっては、戦争をも含めて天皇の政治責任の問題は、忘れることのできない重

大性をもっている。この書物は「はしがき」にあるように、「あの戦争のぎせい者たち、日本人であると外国人であるとを問

はず、軍人もそうでないものも、すべての
ぎせい者たちに、真心こめて」ささげられ
た「天皇の戦争責任論」であり、戦前から
今日までを生きてきた者にとっては、涙を
いやすといった意味をもつものである。

天皇裕仁の戦争責任を問うたこの書物は、
しかし、特別の機密資料や外国での研究な
どをさぐり出して書かれたものではない。
用いられている材料は、すべて市販の、誰
れにでも入手できる出版物から取られてい
る。しかし、これらの材料を駆使して、歴
史家井上清は尖鋭な歴史論、というよりも
むしろ人物論を構築している。これは、歴
史研究は資料よりも史眼のいかんによって
定まるという立場である。本書のもつ迫力
は、その故であろう。

天皇の戦争責任を立証する証人として本
書に登場させられる人物は、すべて天皇の
側近にあった皇族や大臣や軍人などである。
これらの側近、忠臣たちが残した日記やメ
モは、大体において、次のような論理によ
って組み立てられている。つまり、今よい
決定（国民への配慮や和平への希望、戦争
終結など）は、英邁なる天皇に由来するが、
悪い決定（軍人の抬頭、侵略、開戦など）

は天皇の輔佐機関のせいであって、天皇は
利用されたのにすぎない」という筋書きで
ある。

これに対して本書のとっている立場は、
こうである。もしも、「よい決定」をなし
えたというのが事実であれば、当然に「悪
い決定」もなしえたはずである。よいこと
だけして、悪いことや間違いをなしない
人間はいるはずがないし、現に侵略戦争と
いう「悪い決定」がなされている以上、そ
の責任が、よいことをなしうる天皇に帰着
するのは当然だということである。こうして
側近、忠臣の証言は逆手をとりられて、こ
ごとく本書の主張を裏づけるものとなる。
論理のどんでん返しともいうべきもので
ある。面白い話題が豊富に盛りこまれてい
て、飽きることがない。

しかし、これらの側近たちの証言に、果
して誇張や粉飾がなかったかどうかについ
ては、もはや調べようもないことだが、い
くらか気になった。例えば、中国の東北地
方にいた関東軍が挑発行動を起したことは
いかに「聖断」をもってしても止められな
かったのではないか。現代日本の政治が、
最高責任者の意志ひとつにかかって動いて

きたという工合に、もしもこの書物が受取
られるとしたら、それは、これまで軍部や
官僚や財閥の役割と責任を問うてきた著者
の意図とくい違ふことになりはしないか。
そういう感想も浮んだ。（河野健二）

編集者から

本誌の創刊は昨日のここのように思
われるが、もはや五年半の歳月が流れ
た。創刊の経緯は、河野前所長が創刊
号に書かれた「発刊のことば」に明ら
かだが、その創刊号すらもっていない
方がふえている。六九年の学園闘争は
人文研にも衝撃を与え、とくに共同研
究の空洞化が問題とされ、所員相互の
批判と啓蒙とを活発化する必要が痛感
された。そのための一助として本誌が
発刊されることになったのである。そ
のとき編集委員を引受けさせられた私
は、『人文』の原稿依頼は断われない
ことを発刊の条件としたように覚えて
いるのだが。（飯沼）

輯本博物志

— 博物志の研究 —

小南 一郎

一昨年来、科研費を得て行なわれて来た六朝唐宋の類書から「博物志」の引用文を抜き出す作業が一応完成し、去年の夏休み、一気呵成に本文の校定を行なった。まだ訂正を加えるべき点はあるが、「博物志」の我々による定本は、いつでも印刷にまわせる形の原稿となっている。これまでに輯められていない「博物志」の逸文をいくつか加えることができたほか、研究所所蔵の本邦残存典籍による輯佚資料のカードを利用できた点でも、この輯本には価値があるとうと自賛している。

ただ定本を作り訳注を加える作業を通じて輯本というものの限界を知らされねばならなかった。特に「博物志」のように、各々の条それ自体が記録者の思想を表明するのではなく、多くは出典のあるそうした条文を配列し体系づけた方法の中に筆者の世界観があらわされていたと考えられる書物にとっては、その限界が強く行く手を阻むことになる。逸文を輯め本文を校定することは必

須の作業でありながら、少なくとも直接には「博物志」自体の思想を解明することにはならないのである。

しかし校定の作業の中で、原本「博物志」の形を窺うヒントが得られないでもなかった。その一つは、この書物が「洛陽伽藍記」のように本文とそれを細かく説明する注釈的な部分との二段構えになっていたのではないかということである。たとえば「張鷟が西域から大蒜、安石榴、蒲桃、黄藍などを持って帰ってきた」という本文があると、恐らくそれから一段下げて、蒲桃については蒲萄酒に関する話し、黄藍については黄藍から臘脂を作る方法などが記されていたと推測されるのである。

もしこの推測が正しいとすれば、「博物志」は「三國志」裴注、「水経注」、「世説」劉注など六朝期の事実の付加をめざした注釈類とも共通する点を持つことになり、この書物の成立が東晋時代より降らないとして、そうした注釈の形式に見られる六朝人の精神のあり方の最も早いあらわれの一つと考えることができよう。こうした点から言っても、定本はできたのであるが、「博物志」自体の性格の探求は、まだ緒についたばかりである。

なお、中国ならば南宋末まで、日本ならば室町期までの、普通輯本作りに使用しないような書物に「博物志」の引用文があれば、お知らせ下さるようお願いしたい。

近世論理思想史

——西洋近世論理思想の研究——

内 井 惣 七

『ポール・ロワイアル論理学』を起点と考えた近世論理思想の足跡を、十七世紀から十九世紀あるいは現代にいたるまでの諸々の哲学思想のうちにたどっていかうという壮大なプロジェクトをもって始められたこの研究会も、いつしかまとめの段階に入り、所内、所外の班員はほぼすべて各々の研究テーマを決定し、論文執筆に入った。

論文テーマとして出たのは、だいたいつぎのような問題である。

- 一、中世論理思想から近世論理思想への推移期における諸々の学派と問題点
- 二、イデー説の背景（プラトン説から光学的モデルまで）
- 三、ポール・ロワイアルの論理と文法
- 四、英国経験論（ロック、ヒューム等）とポール・ロワイアルとの比較

五、ライプニッツのカテゴリール論

六、名辞論理学の諸形態比較

七、ラッセルの認識論と記述の理論

八、外延・内包説の現代的再構成

九、日常言語学派の論理観

これらのテーマがどのような形で論文にまとまるか、楽しみではある。なお、以上のリストに入っていない重要な哲学思想（カント、ヘーゲル等）については、上山班長の視野の広い論文の中で必ずや触れられるものと筆者は信じている。

社会運動史研究の魅力

——社会運動の研究——

大 前 真

「社会運動の研究」といっても、その研究分野は広く、労働運動にのみとどまるものではない。農民運動、文化運動、部落解放運動、慈善運動、女性解放運動など、要するに、すべて社会的対立関係のあるところ、それに応じた運動が組織されうる。そういうわけで、『人文学報』の掲載欄を見ればわかるように、さまざまな形

態の下で展開される運動が、班員の関心を引いている。

そうであるにもかかわらず、班として共同研究ができるのは、班員一人ひとりの守備範囲の広さもあることながら、対象とされる運動が、たとえば、人脈、思想を通じてつながっているからでもある。

ところで研究班の目標は、運動史上の諸事実を明らかにして、整理し、評価することにある。こうした手順は、歴史研究を手がける者にとっては、しごく当り前のことだといえる。ただ、社会運動研究の場合、過去に対する評価が、直接に現在の運動をどう見るかに結びつくということがある。無論、歴史学が、過去を明らかにして、現在から未来を見通すという問題を設定していることすれば、とりたてて、社会運動史にのみあてはまることではない。にもかかわらずこんなことを感じるのは、運動の歴史が時間的にそれほど長いものではないということ

と、最初に書いたように、運動が常に社会的利害対立の表現である以上、それに対する評価は、対立する立場のどれかを選ばざるをえないことのためであらうか。

いいかえれば、社会運動史にとって、対象となる諸事実は、本当の意味で過去となっていないということ、そして、研究者の側も、たとえ実際の運動にタッチしていないとしても、運動者の論理で歴史を見ることになるのかもしいない。

そういうことは、果たして歴史学全般にわたっていえることなのか、現代史固有の現象なのか、それとも、社会運動史においてのみ起こりうるのか、ひょっとしたら、そのあたりがこの分野の魅力なのか。一年間、いくつかの研究班に参加して、最近では、そんなことを考えるようになった。

人のうごき

・林已奈夫助教授（東方面）は教授に昇任（七月一日付）
・松原正毅講師（西洋部）は国立民族学博物館（第二研究部）助教授に配置換え
・勝村哲也氏を助教授（附属東洋学文献センター）に採用（以上一〇月一日付）
・島田虔次教授（東方面）は文学部に配置換え

当研究所に併任（一〇月一六日付）

・池田秀三氏を助手（附属東洋学文献センター）に、御牧克己氏を助手（東方面）に採用（一二月一日付）
・樺山紘一助手は、八月五日、パリ、ユルドバ（スペイン）、フェズ（モロッコ）、ローマ周辺等で地中海文化圏の社会と文化の調査、一〇月二日帰国
・田中 淡助手は、八月五日、故宮博物院で中国建築学会に出席。大同・大原・上海大

学等で古代建築の視察及び意見交換、同月一日帰国。

・多田道太郎助教授は、九月二日、メキシコシティ、リマ、ブエノス、ブラジリア、サンフランシスコ市内等で中南米都市における戸外空間調査（予備調査）、一〇月二二日帰国。

・河野健二教授は、九月二日、モスクワのソ連科学アカデミーで日ソ経済学者シンポジウムに出席、同月二六日帰国。

研究ノート



技術・デザイン・社会

吉田 光 邦

あいかわらず西に東に散歩的研究をたのしんでいるのがわたしである。専門分野に目標を定めてまっしぐらというのは、どうもわたしの性に合わない。国吉康雄展を見ると、とたんにアメリカ移民の歴史、移民のもっていた心理的屈折が知りたくなる。国吉の絵は実にその反映なのだから。戦前は東南アジアあたりの日本人会の手によって、かなり多くの開拓史も書かれていたのだが。最近では日本近代の対外関係の研究でもそうした面を扱うことはまれである。またこんな問題でも考えてみようか。班研究のテーマの仕事はべつとして、このごろは技術・デザイン・社会といった軸のつながりかたを考えている。技術は人間の文明の形成とともにスタートした。というよりは、技術が

文明の物的要素を準備した。しかしその前提には個的な生活、あるいは集団的な生活の様式のデザインが存在する。恐らく初期の様式は、もっぱら自己保存のためにつくられたけれども、それ以後はある種の秩序形成のためにデザインされてゆく。こうして出来上ったものは、そのまま文化といっていいかもしれない。自律性と有効性を付け加えて。

海外の技術関係のミュージアムの図録をながめていると、十八、十九世紀ごろに作られた科学器械また生産用の機械は、いずれもまことに装飾的である。時としては工芸品の趣きさえある。それが今世紀になるとクールでいかにも能率本位のものとなる。こうした機械そのもののデザインの変化に、技術の持つ内容、また技術に対する意識の変化もよみとれそうにも思える。物にいつも随伴していたはずの、装飾性をはぎとってしまった近代技術の性格。そして日本が輸入したのは、この時期以後の機械中心の技術だったのである。

メソポタミアでのセトルメント・パターン研究

前川 和 也

シカゴ・オリエント研究所のアダムズらによって、メソポタミア南部のテル（遺跡マウンド）のフィールド・サーベイがさ

かんに行なわれるようになった。テル地表に散乱している土器片の表面採集によって遺跡を時期区分し、時期毎の遺跡分布をドットする。また遺跡が村落か、町邑か、それとも都市と呼びうる段階にまで達していたのかといったことをも測定するわけである。同時に、かつてのディグリス・エウフラテス両河、その支流路あるいは古代灌漑流路なども復元してゆく。

このようなアプローチのもとで、これまでたとえば、ディヤラ河流域の調査、ウルク、フアラなどシュメール中心部の調査、ウルおよび周辺小遺跡の調査、キシヌを中心とするアツカド地域サーベイなどが行なわれてきた。アダムズたちはディヤラ流域調査にもとづいて、人工灌漑網の整備はメソポタミア都市発展の原因ではなく結果であったと主張して、ウィットフォードの水利社会論に挑戦したし、またウルク周辺部の調査からは、都市と農村の関係について重要な結論を引出している。つまり、ウルク期までウルク周辺に稠密に集まっていた多くの農村は、次の初期王朝期にはいると急速に消滅して、同時にそれまでの地域でただひとつ存在していた都市ウルクはさらに急激に膨脹する。この現象に平行して、ウルクとはかなりの距離にある他町邑がはじめて都市段階にまで成長をはじめたらしい。いいかえるならば、初期王朝期において、はじめて世俗的王権がウルクで確立したというのであり、また諸都市相互をへだてて広くパストラル・ランドないし半砂漠が存在するといったのちのシュメールの地のありかたは、多くの農村が都市に吸収されるこの時期になって形成されはじめたのである。

この報告はなかなか刺激的であって、ジェイコブセンの原

始民主政論ともかなり重なりあっているようにみえる。また、各都市、地域毎の偏差を無視したままシュメール文明の成立を一括して論じることがもはや許されなくなったというアダムズの示唆も注目してよい。

にもかかわらず、サーベイの方法的厳密性はどこまで確保されているか。土器片の表面採集・整理だけで、テベの規模や時期がはたして確実に区分されるか。ディヤラ流域報告内のデータ処理に、のちになってアダムズがいくつかの訂正を加えなければならなかったことも、この危惧を裏付ける。このようなアプローチと、同じくシカゴ・グループの文献学（楔形文字史料統解）とのあいだに、いまのところ橋がかけていないこともおおいに気になる。サーベイ報告結果は作業仮説としては刺激的だけれども、文献学者からすれば、それはいまのところ事実復元の確実な武器にはなりえていないというわけだろうか。それともこの二学問はさいごまで相交わることがないのだろうか。

文学は復讐するか？

茂 木 信 之

戦闘的な気分になるとよく思い出される格言（？）に、初心

忘るべからず、というのがある。すると、飽くまで身を退け慎みたい思いに駆られもし、闘志を鼓舞されもする。いま、別に戦闘的な気分になつてゐるわけではないが、新年だから、言わば書き初め風に、この格言を思い浮かべてゐるのである。

わたしに、たつたひとつの初心、というようなものがあるわけではない。自分で危機と思ったときどきにひねくり出した標語、格言もしくは定言命題の如き章句どもが、思い返されるべきわたしの「初心」である。それらの章句すべてを裏打ちしてゐるのは一種の不可能感とでも言うべきものであり、生あたたかい生き物に触れるようにこの不可能感を受感するとき新鮮な意志の思いが誓いのようにこみ上げてくる。わたしはこれを『復讐』の意志と自ずから名づけてもいいと思つてゐる。室生犀星が『復讐の文学』を言い、太宰治が、『道化の華』で何故小説を書くかと自問し、『仮りに一言』『復讐』と自答し、或いは魯迅が『野草』中の散文詩の二篇に『復讐』と題したことにわたしは、言わば無条件に共鳴せざるをえない。彼らのうちに別様固有の不可能感の如きものが生なましく触知されるからである。ここでいさぎよく悪解を發揮し、『文学は復讐する』という命題(?)を仮りに立ててみると、さて、この命題(?)と、是が非にもつき合わせてみたくなるのは、ジョルジュ・バタイユの「文学とは、本質的なものか、そうでなければ、なにものでもないものである。」(『文学と悪』まえがき——山本功訳)という言葉である。バタイユのこの至言は、到達すべき窮極、すなわち実現されるべき人間の本質を志向しながらいま在るがままに在る、といった人間の現存性と、そのように現存す

るほかはない人間にとつて文学が何であるのかということをも、的確に言い当ててゐるように思える。『本質的なもの』自体でも、なにものでもないものの「自体でもありえない人間の現存性を、文学は止揚するのであるがその止揚は架空のことではかない、というあたりのいきさつの微妙さが、そうでなければ」という接続詞でとらえられてゐると言うことができよう。ところで、もしここに「時間(時の長さ)」「性を与えるならば、(「それゆえ」文学は復讐する)」という命題が成りたつのではないかという気がする。すなわち、『架空の止揚』たる文学が『止揚の現実的・不可能態』たる在るがままの人間に復讐する、というわけである。

さて、注意深い読者は先刻気付かれたはずだが、わたしは、行文の自然な展開に従えば「文学者は復讐する」となりそうなところを「文学は復讐する」とした。親切過剰のもの言いかしらんが、ここをとくに強調しておきたい。「文学者は復讐する」などというのは命題にも何にもなるわけがない(どんな人間だつて復讐はするから)が、「文学は復讐する」という命題が成りたつか否かは、まさしく本誌の「研究ノート欄」で論及されるに値する文学理論研究上の一問題たることは疑いないのである。

旅

旅行嫌いの旅行論

多 田 道 太 郎

昨年（一九七五年）には、三度、海外に行く機会に「恵まれ」た。春にシルク・ロード、夏にハワイ、秋にはアンデスを超えて——などという、何とかバック旅行の典型みたいなもので、三分の二は気恥かしく、三分の一ほどは、「ほう、羨ましいですね」という人の目を意識して、その意識と、私の旅の実態とのズレに呆然としてしまう。

傍目とはかく、主観的にはサンタンたる「旅」である。人類学者、現地調査の第一の心得は、樺山紘一氏によると、現地のものが何でも気嫌よく食べられることだそうである。何も樺山氏の名前を持ちだすまでもなく、それは現地研究のABCであるとはかの友人にたしなめられた。そこで私は沈黙する。私の食の好みについてはこの際、沈黙することにするが、たとえばロシアのボルシチの、あの汁の上にぎらぎら浮ぶ油をみただけで、シルク・ロードの最後の旅程には反吐がでそうになった。（その点、またその他の点についても、同行の桑原武夫先生や樋口謹一氏はみごとな適格者であったという証言をしておく）。

旅行の最大のたのしみといわれる風景についても、私は敏感、かつ独創的反応をおこす人物ではない。ハワイで一ヶ月、セミナ

ーのかんづめになったときも、セミナーには毎日熱心にかよったけれど、ついに、一度も海で泳がなかった。かんづめになっていた宿舎はワイキキの近くの浜辺にあり、ゾウリばきで海岸に出られるのである。真黒に陽にやけたイランの友人が、タオルにくるまり、嬉々とした表情でホテルに戻ってくる。「君は今日は泳いだか」と私に聞く。「いやこの一月、一度も海に入ったことはない」と答えて、呆れられた。「日本人はビジイだけでなく、クレイジイなんだね」。

まあ卑下自慢に似たこういう話はここで措く。秋、南米の都市調査に建築の上田篤氏と同道した町には、上田氏から穴熊というアダ名をもらった。何でも聞くところによると、王さまが隅に逃げ、香車をその頭におくという将棋の布陣によって名人位に迫るという「穴熊」の名手が近ごろ出現したという。私の旅行嫌いのコンプレックスも「穴熊」的妙手を編みだし、異文化を見る自分本位の「位相」を発見できる動因となりうるかどうか——。私はいまだに、一行も、シルク・ロードについて印象記らしいものを書いていない。

この拙文が、強いられての皮切りである。

牡羊の鈴とふんどし

谷

泰

ふたたびイタリア中部山村調査にでかける機会をあたらせて、旧知の牧夫フランチェスコの牧夫小屋にしばらく滞在した。栽培

植物の管理とはちがって、家畜管理には、まったく別個の管理のポイントがある。この地域の放牧家畜管理の些細を、牧夫と行動を共にして観察するのがこゝまで上つてきた目的であつた。

フランチェスコは、弟の羊と合せて六〇〇頭の羊群を、息子と一緒に毎日つれ出して、山の牧地を巡回し、夕方になると山小屋にもどってくる生活を繰り返している。朝仔羊への授乳を終えると、網柵の一部を倒して群を出す。フランチェスコの移動の一日は、これをもつて始まる。ところで六〇〇頭中ほとんどが牝羊である。かれらは二つの群に分けられて別々の柵に追ひこまれて、完全に隔離されている。朝、網柵を倒すとき、かれは、この両群が入り混らぬように注意して別方向に追い出す。そして一方の群を自分が誘導し、他群を息子にまかせる。放牧中も両群が混り合わないよう、息子に別のルートを示す。しかしときに息子の怠慢で、両群が接近することがある。フランチェスコはそんな時、怒り狂つたように興奮し、両群を遠去けて、息子をどなりつける。あるとき怒りの余り、息子をなぐり倒したこともあつた。

いったいなぜ群を二分して隔離しているのか。はじめわたしにはその理由はわからなかつた。当初わたしは、どういふ羊に鈴をつけるのかという関心がつよくて、そればかりに気を配っていた。鈴は、牧夫が群を見つけた時、その音で位置を知るのに役立つばかりか、鈴の音は、まぎれた羊を呼ぶのに役立つといわれている。大鈴をつけた羊が誘導羊といわれるのはそのためだ。地方によつて鈴のつけ方は異なるが、ここでは牡羊だけが鈴をつけていた。

ところでわたしは、分けられた二群のあいだで、鈴をつけた牡羊の数に差があるのに気がついた。一方の群には十頭余の牡羊が

いるのに、他群には鈴をつけた牡羊は一頭しかない。誘導が目的なら、両群中の牡羊が同数ぐらいいてもよいのに、他群には牡羊が一頭しかないのはどういう訳か。おまけにこの牡羊は粗い毛布のふんどし様のものを腹にまいていたのであつた。もう一方の群の牡羊たちはそんなものをつけずに、自由に牝羊と交わっている。フランチェスコは、この自由な牡羊のいる群を種子付け中の群だといつた。とすると、他方の群は、種子付待機中の群だといふことになる。ふんどしという雄々しい感じが、じつは体のよいおすの貞操帯ではないか。種子付待機中の牝群のなかで、この牡羊は、「女の中の男が一人」といったかたちで、牝たちの誘導の任務を課せられながら、牝との交わりを禁ぜられているといふことになる。いかにも残酷というか、あまりにもあわれな姿ではないか。

それにしてもなぜこのように、種子付け管理をするのだらう。フランチェスコの説明はこうであつた。六〇〇頭の羊が、放任されて、間断なしに仔を生んだのでは、放牧中の出産の世話だけでも大変である。一定時期に出産を集中させる方が楽である。その上仔羊は、クリスマスや復活祭に、需要があるのだから、まともにこの時期の少し前に、二度に分けて生まれてくれることが望ましい。その上いっきよにある一時期に出産されては、母羊の乳産量が平均しない。こういう配慮から、種子付けは、年二回か三回に分割されて、計画的に行われるといふのである。種子付進行中の群と、待機中の群とに二分されるのはこういう理由からであつた。ところで放牧中誤つて二群が混り合つては、一年の計が台なしになってしまう。フランチェスコが息子をしっかりとばした

のは、まさにこのためであった。

ともあれこういう説明から、群の二分ということも、ふんどしをつけた牡羊の存在も、その理由が理解できた。しかしそれにしてもあわれなのは、鈴とふんどしをつけた孤立牡羊の身上である。一〇頭余のふんどしなしの牡羊は、鈴をつけた誘導羊として、牝たちのリーダー役を果すとうじに、セックスの代表選手でもある。ところがこのふんどしをつけた牡羊は、牝たちの誘導の任を負いながら禁欲を課せられている。教会の鐘をならして、仔羊として象徴されている信者を牧する司祭の身上をそこに見出したような気がした。ただ、司祭は性の禁欲を課せられてはいるが、権力をもっている。あわれなのは、この鈴をならしながらふんどしをつけられた牡羊ではないか。地中海牧畜文化には、去勢された宦官のような牡羊の話もある。ちかごろエックとかバックといった団体旅行の人たちがもち帰ったのか、いたるところで、家畜の鈴のスーヴニールにお目にかかる。しかし鈴をつけた羊のなかには、こういうふんどしをつけられた牡羊もいることはあまり知られていない。旅の土産話として、羊の鈴だけではもう陳腐な時代になった。そう思って、鈴とふんどしをつけたあわれな牡羊の話をさせてもらった。

五台山仏光寺の二日間

田 中 淡

七五年八月一四日の午後、わたしたちの団（日本古代建築友好

訪中団）は、何年もまえから写真と図面と調査報告で想像していた五台山仏光寺を、じっさいに目の前にする機会をえた。八五七年建立の大殿という、中国木造建築の代表的名作を擁しているの、なんとか訪れたいという、わたしたちの願いを、中国建築学会はじめ関係のみなさんの尋常でないご好意が、実現してくれたのであって、わたしたちはあまりにも幸福であったといわなければならない。ふるくは成尋が参詣して記録を著わし、重源に、自分も行ったことがあるとさえ言わしめた、仏教霊場としての五台山の全体からみれば、そこはむしろ山の麓とさえおもえる一隅にすぎない。それでも、前夜、これも望外の五日間の見学を許可された大同をあとにして乗りこんだ夜行列車で、まだ暗い忻県につき、午前中を中国最古の木造遺構のある、同じ五台县の南禅寺ですごしてから、マイクロバスでそこにたどりつくまでには、雨がふれば川になるところを二か所ほど越え、四時間ほどもかかった

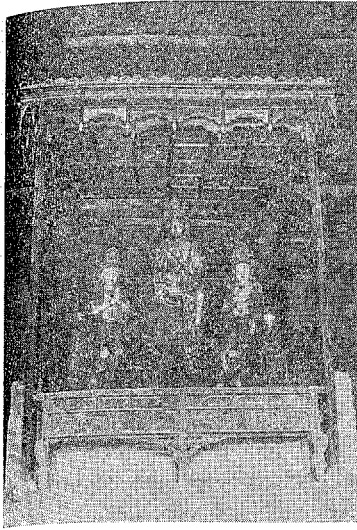


仏光寺大殿

かとおもつ。

ついに眼前にした仏光寺は、当然のことながら、かつて梁思成氏が『雁北文物勘察報告』に描いた配置図そのままに、整然とした伽藍を区画していたが、堂塔のまえには文物保管所のネーム入りの陶器の鉢植えや、整頓された花壇が、公園のようににはやかにしつらえられ、切妻造の門には「參觀規則」が掲げられるなど、そのひとつひとつが、いまはそこが文物保護単位として、ゆきとどいた保存と遊覧の対象になっていることを、じゅうぶんにしめしていた。

大中十一年の大殿は、それより百年たらずさかのぼる、わが唐招提寺とは、現地での討論をつうじて、かつては後者と同様に前面一間を吹放しにしたコロネード形式であった時期さえ考えられるなど、多くの共通的要素をもつものであったが、しかし、後者よりも重厚で、直截的で、木太い、そのテクスチャーには、まさ



仏光寺文殊殿塑像

にオリジナルのものをみせつけられた気がした。

仏光寺では山西省文物工作委員会の柴沢俊氏、雲岡では国家文物管理局の余鳴謙氏、雲岡石窟文物保管所の李志国氏というように、現場に従事する専門の人びとから具体的な説明をきき、わずかながら質問・討論の機会もあったが、そのつど、かれらが日本の法隆寺・唐招提寺などにかんする的確な知識をもっているのにたいし、いまさらながらわたしたちの現状を訝しくおもった。もういちど、かれらとの討論・学習の機会があれば、と念願する。

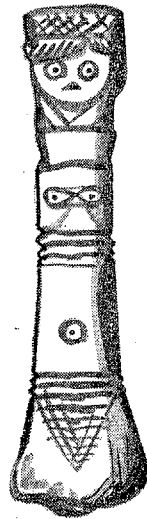
その夜、文殊殿の東わきの禅堂、香風花雨楼に分宿することになったわたしたちに、そこでも催された歓迎酒会は、格別であった。ランプの下で開かれたそれは、わたしたちのために夜具などを含めて一括して運びこまれた材料をつかい、とくに派遣された専門の料理人が腕をふるうというものであった。そこでの四回の食事のために一匹ずつ以上の豚と鶏をつぶしたらしい料理は、北京と同様に薄味でやや甘い大同のそれよりも、日本人好みの華麗な上海の菜單よりも、むしろ濃厚な、すばらしいものだった。

(帰国まぎわに上海で買った澱粉と藕粉をつかって、何度その味を復元しようとしても、当方の豚の貧しさゆえか、一向に真に迫ることはない)。

こんなにすばらしい接待を、わたしたちはおそらくできないだろうが、このつぎは、中国ほど広大でない、しかし独自の風格をもつ日本の建築を、ぜひかれらに見ていただきたいとおもつ。

書いたもの一覽

一九七五年五月—一九七五年一〇月
(五十音順、㊦印は単行本)



・会 田 雄 次

正論

現代時評

㊦アロン収容所再訪

㊦決断の条件

・飛 鳥 井 雅 道

大正の文化 (座談会、鹿野政直、小木新造と、

『歴史の視点』下)

中江兆民と『東雲新聞』(座談会、河野健二他と

復刻『東雲新聞』第一巻、月報)

『世界文化』と『土曜日』復刻

啄木の思想の質

固執する精神のドラマ (『平野謙全集』第四巻、解説)

新潮社 七月

河上肇研究の展望 (1、2、3) (座談会、出口勇蔵

他と、『社会問題研究』復刻版月報) 社会思想社 八月—一〇月

『共産党宣言』(図書紹介)

解放新聞 十月六日

㊦『坂本龍馬』

芥川龍之介 (ゼミナール『続近代文学』)

朝日新聞社 一〇月

・荒 井 健

李商隱の詩について

錢鍾書『包圍された塔』第一章 (訳)

鷗風 八号 一〇月

・飯 沼 二 郎

受けつぐもの、引きつぐもの

政治に無関係ということ

書評・小島麗逸『中国の経済と技術』

朝日ジャーナル 六月—三日

書評・青木恵一郎『若手農業風土人物誌』

日本産業における複合経営と土地問題 (座談会・

利根一郎、ぬやまひろし氏と)

農林図書資料月報 六月号

伝統技術捨てた日本農業

日韓の黒い癒着と金大中事件

月刊エコノミスト 九月号

農民を死に追いやるもの (伊東光晴編

統一評論 九月号

農民を死に追いやるもの (伊東光晴編

『ドキュメント昭和史』八巻)

美のうちそと

平凡社 九月

信教の自由と国家権力

毎日新聞 毎週月曜日 九月

農業経営革命の条件をさぐる

朝日新聞 九月一七日

東洋経済 臨時増刊三四号 一〇月

近代日本の農業革命(『農法展開の論理』の内)

お茶の水書房 一〇月

●井上 清

◎天皇の戦争責任

現代評論社 八月

◎宇垣一成

朝日新聞社 一〇月

●上山 春平

◎統帥々の体系

中央公論社 五月

今西錦司全集(第一〇巻、解題)

講談社 六月

石笛考

季刊人類学 六巻三号 一〇月

●江村 治樹

中国中世の説話——『太平広記』の世界④ 三、狐の話

伝統と現代 三三号 五月

●太田 武男

◎現代の親子問題

有斐閣 九月

●尾崎 雄二郎

和語と漢語のあいだ——「宗祇覺字百韻」輪読——

(六)(佐竹昭広 島津忠夫両氏と)

文芸展望 夏号

水滸伝受難

サンケイ新聞 九月二三日

●勝村 哲也

書評・森鹿三著『東洋学研究——居延漢簡篇』

(東洋史研究叢刊二三之三) 仏教大学学報 二五号 一〇月

●樺山 紘一

「異端」——概念から方法へ 社会科学の方法 六・八月号

書評・サムナー『フオークウニイズ』

中央公論 八月号

近代社会科学としての丸山政治学

経済セミナー 九月号

風土さまだま考

知の考古学 九・一〇月号

●河野 健二

ジャック・ルカイヨン「低成長と公正のジレンマ」

エコノミスト 六月三日号

ソ連への旅

朝日新聞 一〇月一七日

歴史家の仕事

読売新聞 一〇月二七日

●熊倉 功夫

比較茶の文化紀行

淡交 八月

特異なる文化

やすらぎ 一〇月

近代の茶の湯

日本美術工芸 九・一一月

最近の茶の湯研究から

茶湯一〇号 一一月

●竹内 実

抗日民族統一戦線と中国文学

国文学 七月号

中国の茶館

やすらぎ 七月号

書評・太田勝洪『毛沢東 外交路線を語る』

朝日ジャーナル 七月二一日号

日中協約としての反霸権 朝日ジャーナル 七月二十五日号

空想対談・孔子と毛沢東 経済セミナー 八月号

解題・小沢信男ほか『戯曲 故事新編』 河出書房 九月

ポスト毛周の後継者は鄧小平か(対談) 週刊朝日 一〇月三十一日号

◎『中国への視角』 中央公論社 七月

●多田 道太郎

Japan ; Communication mores in places where
people gather (Comparative popular culture
research seminar)

宇野浩一(『続・日本近代文学』) 朝日新聞社 九月

◎動詞人間学(共著) 講談社 九月

◎トインビー『世界の歴史』(共訳) 学研 一月

●田 中 謙二

文選に現われない文字(『全訳漢文大系』月報、一七) 五月

◎元曲五種(補注、東洋文庫) 平凡社 九月

●田 中 淡

中国建筑の歴史 五一〇(共訳) 建築知識 五一〇月

◎日本国宝一〇〇選(共著) 秋田書店 七月

重源と大仏再建 月刊文化財 七月

●谷 泰

文化的表象の陰にあるもの 理想 五月

Status, Role and Self-identity in Japanese Social

Relationships (Rivista Internazionale di Scienze

Economiche e Commerciali, Anno XXII, N.7-8) 七月

◎マドリッド手稿(共訳) 岩波・マック・グロウ・ヒル 七月

◎知られざるレオナルド(共訳) 岩波書店 九月

書評・小川了『フランス北部における闘鶏士社会』

時ぬすみ儀礼の誕生 季刊人類学 六一三 九月

●礪 波 護 諸君 九月号

わが書架の吉川先生コーナー

(吉川幸次郎全集 二三巻、月報) 九月

●林 巳 奈 夫 平凡社 一〇月

「玉器」(大阪美術館編『漢代の美術』) 九月

●林 屋 辰 三 郎 平凡社 一〇月

日本ルネッサンスの開幕―信長時代と安土城 歴史と人物 五月

座談・外来文化の取り入れ口―北陸 五月

(『日本文化の源流を求めて』) 筑摩書房 六月

座談・東北アジアの活動と日本文化(『日本の渡来文化』) 六月

私の卒業論文(『論文レポートの書き方と作文技法』) 中央公論社 六月

私(『論文レポートの書き方と作文技法』) 画文堂 六月

芸能史における観客と環境 芸能史研究 七月

神と王との遍歴 一・二(『日本史探訪』別巻古代編Ⅱ)

◎『内乱のなかの貴族』（季刊論叢「日本文化」一）
角川書店 八月

角川書店 九月

●樋口 謹一

高姿勢と低姿勢

書評・久野収『政治的市民の復権』（大切な草の根

集団の政治参加）

朝日ジャーナル 八月二二日号

●日比野 丈夫

葉昌熾の二尺牘（訳注「語石」別冊）

おせきさん

省心書房 一〇月
きょうと 八一 一〇月

漢代の歴史と社会（『漢代の美術』）

●古屋 哲夫

民衆動員政策の形成と展開

第五五議會貴族院衆議院・第五六議會貴族院解説

（『帝国議会議』一卷）

季刊現代史 六号 八月
東洋文化社 六月

第五六議會衆議院解説（『帝国議会議』四卷）

●前川 和也

ab-sin (absinu, absenu) について

古代オリエント研究会学報 第一冊

古代オリエント研究会 五月

●松田 清

J・J・ルソーの「あやまち」の意識について

フランス語フランス文学研究 二七号 一〇月

E・クルドロフ (1825—1862) の『亡命日記』について

同右 一〇月

●森 時彦

『三十三年之夢』賛

京都大学新聞 一〇月一六日

●山下 正男

動物寓話の代数学

歴史観の数学的モデル

牧神 二号 一〇月
現代数学 九月

●山田 慶児

空間・分類・カテゴリー——科学的思考の原初的、

基礎的な形態

◎混沌の海へ——中国的思考の構造

●横山 俊夫

An Interpretation of Honda Rimeis "Old Japan" in

Kan'akata, typescript, pp. 1-15.

展望 九月号
筑摩書房 一〇月

●吉川 忠夫

書評・村上嘉実『六朝思想史研究』

東洋史研究 三四卷一号 六月

ニーダム『中国の科学と文明』第三卷思想史、下（共訳）

思索社 七月

六朝時代における『孝経』の受容・再説

古代文化 二七卷七号 七月

中国の排仏論

●吉田 光邦

南都仏教 三四号 七月

黒潮の文化

もめんのはなし

タイル随想

東洋と西洋の技術観

産業社会と宗教

アールデコと二〇世紀のファッション

世界への船出

伝統と現代

◎工芸と文明

都市の人間化は可能か(談話)

パピルスと羊皮紙

高度成長の意味を考える(座談)

日本における現代衣服の成立

コミュニケーションとI・D

水(座談)

平賀源内(『人物探訪日本の歴史』二二)

危険と安全

ニュートン以前の土木技術と力学

◎きれ

アプローチ 五月

マダム 五月

建築と都市 六月

近畿化学工業界 六月

世界政経 六月

芸術生活 六月

太陽 六月

オール関西 五、六月

日本放送出版協会 六月

経済と文化 七月

播磨技術ニュース 七月

マネジメント 七月

モード・エ・モード 七月

デザインニュース 七月

ぱいぶ 七月

読教育図書 七月

標準化と品質管理 八月

土木学会誌 八月

主婦の友社 八月

漢方薬物語①

海洋博のソ連館

ペルシアカーペット小史

沖縄での感想

幕本と現代と

文明の中の空間と時間

角倉了以

絞りの変遷と美

西陣の歴史

東方の鉄

日本古典文学全集(月報)

アイ・アイ・アイ

●渡部 徹

神 利夫批判(1)―(3)

七一九―二二二号 五月一九日、二六日、六月二日

部落解放運動(岩波講座『日本歴史』一八、近代五)

全協刷新同盟の婦結をめぐる問題―日本共産党との関連

(『神山茂夫研究』一号)

神山茂夫研究会 一〇月

ひろば 九月

窓 九月

染織と生活 六、九月

きようと 一〇月

新刊の目 一〇月

阪神ハイウェイ 一〇月

みずのわ 一〇月

きものと装い 一〇月

美しいキモノ 一〇月

鉄 五―一〇月

小学館 五―一〇月

カラーデザイン 五―一〇月

解放新聞